

西福井遺跡の発掘調査について

- 府立福井高等学校建設に伴う発掘調査の概要 -

岡田 賢

1. はじめに

大阪府教育委員会（以下、「府教委」という。）では、ここ数年、茨木市立文化財資料館との共催により、コーナー展示として府教委の調査資料を展示する機会を得ている。このうち平成 28 年度は「府立福井高校に眠る遺跡 - 西福井遺跡の調査成果 -」と題し、昭和 57 ～ 58 年度に発掘調査された西福井遺跡の調査成果を紹介した。また同年度には資料館事業である郷土史教室講座において「府立福井高校の発掘調査成果」として市民に成果を報告する機会をいただいた。

本稿は、それらの内容を基に若干の補足を行ったものである。以下に述べる概要については、この展示と講演を共に担当した西口陽一氏、宮野淳一氏に負うところが大きいことを明記しておく。

2. 遺跡の位置と環境

西福井遺跡は、茨木市西福井三丁目から東福井二丁目を中心に、南北 680m、東西 370m の範囲に広がる縄文時代から近世まで継続する複合遺跡である。遺跡は低位段丘上に立地しており、一部に

は扇状地を含む。遺跡の東を流れる佐保川は、北摂山地を南流して茨木丘陵から低地部へと抜けるが、その丘陵を抜けるあたりに西福井遺跡はある（図 1・3）。

周辺には、遺跡の西～南西側の丘陵に古墳時代前期の古墳として著名な紫金山古墳をはじめ、後期の南塚古墳、海北塚古墳などがあり、式内社である新屋坐天照御魂神社がある丘陵内には新屋古墳群がみられる。また佐保川をはさんだ東側の丘



図 1 調査地位置図

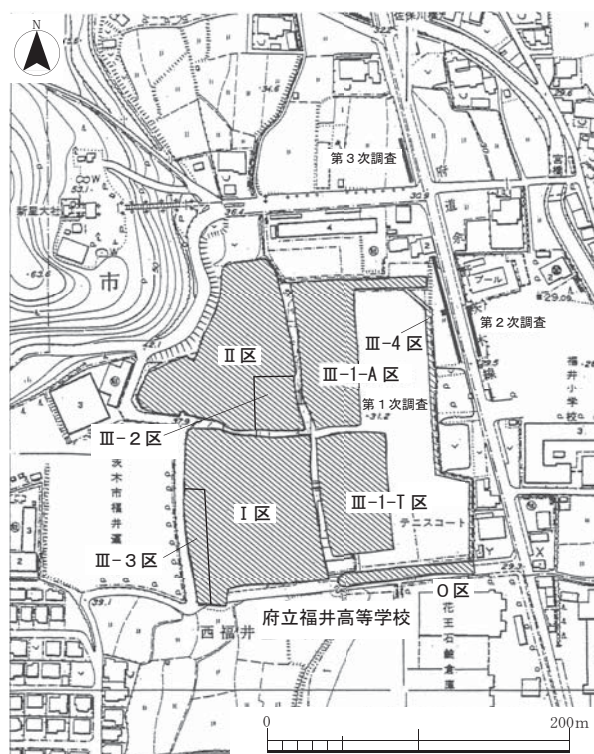


図 2 第 1～3 次調査地点と調査区割

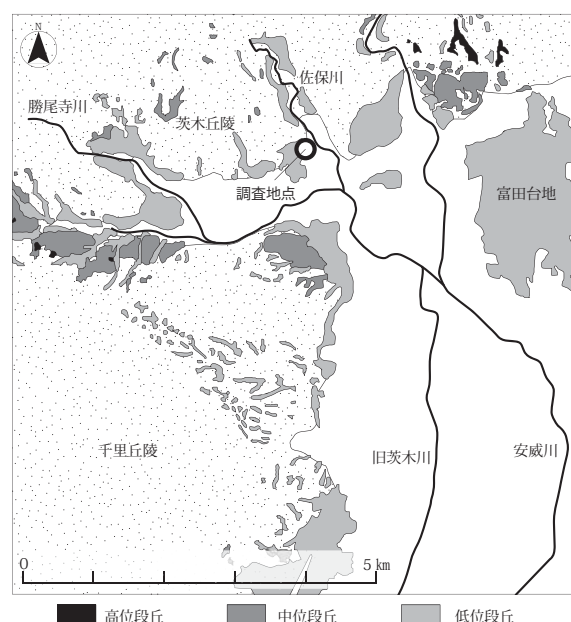


図 3 調査地点と周辺の地形

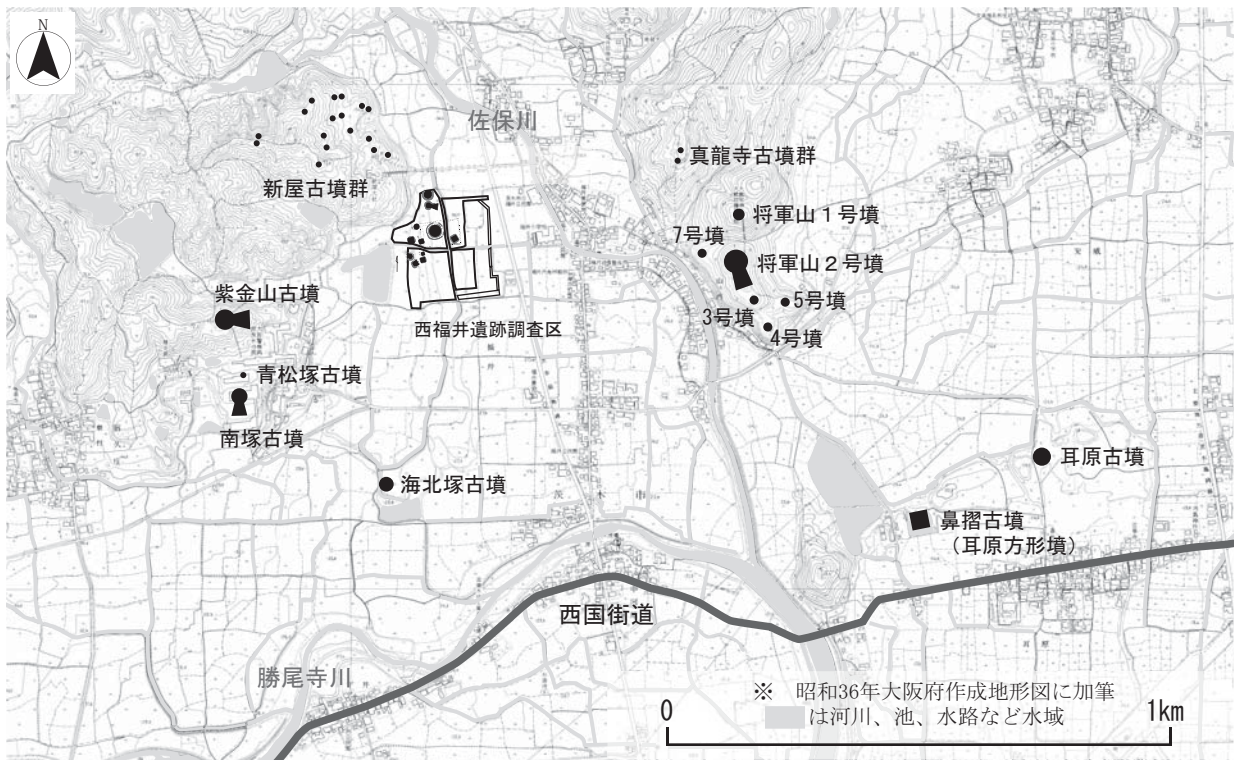


図4 西福井遺跡調査区と周辺の古墳

陵には古墳時代前期の將軍山古墳をはじめ、後期の將軍塚古墳を含む將軍山古墳群、真龍寺古墳群がみられ、この付近は茨木市域においても古墳の多い地域といえる。また遺跡の東に接するように三島街道が亀岡方面に南北に、さらに遺跡の400m南には西国街道が東西に走る(図4)。

3. 発掘調査の概要

昭和58年、府教委は府立福井高等学校の建設に先立ち、発掘調査を実施した。調査期間は同年2月から11月までで、調査面積は24,000㎡である。調査区は0区、Ⅰ区、Ⅱ区、Ⅲ区にわけられ、西端のグラウンドの擁壁部分はⅢ-4区とされた。なお調査の進捗によりⅢ区は複数にわかれ、Ⅰ区南西部がⅢ-3区、Ⅱ区の南東部がⅢ-2区となる。またⅢ-1区の北側はⅢ-1-A区、南側はⅢ-1-T区としている(図2)。

この調査が第1次調査であるが、府教委ではその後、府道余野茨木線の歩道整備工事に伴い平成27年度に第2次調査、平成28年度に第3次調査を行っている(大阪府教育委員会2017、2018)。

以下、第1次調査について時代ごとに主な遺構を中心に調査の概要を述べていく。

【縄文時代】

縄文時代に属する明確な遺構は存在しないもの

の、Ⅲ区の北部からⅢ-4区を中心に、中期中葉から末にかけての土器片が出土している(註1)。これらの土器片は、「黒褐色粘土」から出土している。この土層はⅢ-4区周辺にみられる堆積層で、Ⅰ区やⅡ区では後世による削平のためか認められない。またこれと類似した黒褐色～黒色を呈する粘質シルト～砂質土が、第2次調査区や第3次調査区でも認められ、主に後期～晩期の遺物を含んでいる。この縄文時代の遺物包含層は、西福井遺跡の西半部、佐保川右岸の段丘上に堆積しているとみられ、近辺に縄文時代集落の存在を予測させる。なお第3次調査区では、後期に属する焼人骨を収めた土坑を検出しており、西福井遺跡における縄文時代の明確な遺構として初めての検出となった(大阪府教育委員会2018)。

【弥生時代】

弥生時代前期に属する土坑、溝などが複数検出されている。Ⅰ区では廃棄土坑であるSK50(写真3)、SK69(写真4)、溝SD5003内の土器溜りであるSK61などから壺、甕、鉢などが出土している(写真15・16)。またSK53からは緑色片岩製の大型石包丁、古代の遺構であるがSD64からは大型蛤刃石斧なども出土している(写真17)。

中期の遺構、遺物は出土していない。後期の遺構としては、Ⅰ区のSK45、Ⅱ区のSD29(4号墳



図5 西福井遺跡全体平面図（1/1500、トーンは古墳周濠を示す）

の周濠）、SK2003、SK2005などの溝や土坑から主に後期後半に属するタタキ甕や高坏などが出土している。

【古墳時代】

古墳時代の遺構としては、11基の古墳が発見されている。これらはいずれも墳丘が削平されており、周濠の検出によって把握されたもので、円墳、方墳、前方後円形を呈するものからなる。規模等は既に明らかにされているが（奥 1998）、改

めて触れておく（註2）。

1号墳（写真5）はII区の西側で検出された径約11mの円墳で、幅約2.0m、深さ約0.4mの周濠であるSD2006がめぐる。SD2006の埋土は大きく3層からなり、上層は茶灰色粘質砂泥、中層は暗茶灰色砂泥、下層は淡茶灰色粘質土である。周濠内からは円筒埴輪片、須恵器坏身や甕口縁部が出土している（写真19）。

2号墳（写真6・7）はII区の北端で検出さ

れた径約 18m を測る円墳で、幅約 3.0m、深さ約 0.6m の周濠 SD17 がめぐる。SD17 の埋土は、大きく 3 層からなり、上層は淡灰色砂泥、中層は暗灰色砂泥、下層は黒灰色粘質土で、いずれの層にも埴輪片が含まれる。周濠内からは円筒埴輪片、形象埴輪（鶏形埴輪の頭部）が出土している（写真 20）。

3 号墳（写真 1・11）はⅡ区の南半部からⅢ－2 区にかけて検出された径約 22m の円墳で、幅 2～3m の周濠 SD18 がめぐり、その外側に 3～4m の間隔をおいて幅 1m 程度で深さ 0.3m の周濠 SD31 をめぐらす二重周濠となる。北側が中世の区画溝によって切られているが、周濠を含めた全体規模は 34.5m になる。SD18 の埋土は大きく 3 層からなり、上層は淡灰色砂泥、中層は暗茶褐色砂泥、下層は黒灰色粘質土である。主に中層からまとまって円筒埴輪片等が出土している（写真 18）。SD31 の埋土も 3 層からなり、上層は灰色細砂、中層は茶灰色砂泥、下層は暗黄灰色砂泥からなる。

4 号墳（写真 7）はⅡ区の北部、2 号墳の南側で検出された。前方後円形を呈するように周濠が途切れながらめぐるが、不明確と言わざるを得ない。前方後円形とすると、全長約 23m を測る。周濠 SD15 がくびれるようにめぐり、これに対応するように SD11 がわずかに認められるが、前方部前面では周濠自体が認められない。後円部の周濠は SD29 で深さ約 0.3m を測り、埋土は 3 層からなり上層の灰色砂泥、中層の暗褐色砂泥、下層の暗青灰色砂泥である。SD15 から円筒埴輪片、SD29 の主に中層から円筒埴輪片、須恵器坏身が出土している。

5 号墳は 1 号墳の北側で検出された円墳とみられるが、周濠 SD43、SD37、SD38 は一周せず途切れており、墳形が不定形となっている。規模は全長で約 8m を測る。SD43 は深さ 0.1m で埋土は暗茶褐色砂泥、SD37 は深さ約 0.2m で埋土は黒灰色泥砂、灰色泥砂を主とする。SD37 から須恵器坏蓋、坏身等、SD38 から須恵器甕が出土している。

6 号墳は 1 号墳の東側で検出された一辺約 5m に復元できる方墳で、周濠のコーナーの一部を検出したにとどまる。周濠 SD2005 は幅約 2～3m、深さは約 0.3m で、埋土は暗茶褐色シルトである。

7 号墳はⅠ区で検出された一辺 5.5m を測る方

墳で、幅 0.6～1.0m の周濠 SD68、SD69、SD70 がめぐる。SD68、SD69 は深さ 0.1～0.15m で埋土は暗茶褐色粘質砂泥である。

8 号墳は 7 号墳の南側で検出された一辺約 9m の方墳で、幅 0.6～1.5m の周濠 SD53 がめぐる。

9 号墳（写真 8）はⅠ区の西端で検出された径約 12m の円墳で、幅 2.0～2.5m、深さ 0.4m の周濠 SD63 がめぐる。埋土は上層が灰黄色粘質土で、中層は暗茶褐色粘質砂泥、下層が暗灰色粘質シルトからなる。SD63 からは朝顔型埴輪片が出土している。

10 号墳（写真 8）は 2 号墳の南側で検出された一辺約 9m の方墳で、幅約 2.0m、深さ約 0.1m の周濠 SD62 が西半分に残存し東半分は削平を受けて残存していない。SD62 の埋土は 1 層で暗灰色粘質土である。

12 号墳（写真 9）はⅢ－1－A 区の南部で検出された、一辺約 11m の方墳で、幅 2～3m、深さ約 0.4m の周濠 SD35016 がめぐる。埋土は 3 層からなり、上層は淡灰褐色砂泥、中層は暗茶灰色砂泥、下層は暗灰色細砂である。

これらの古墳は、周濠から出土した須恵器や円筒埴輪などから、概ね 5 世紀後半を中心とする時期に築造されたとみられるが、築造順序やより詳細な時期については今後の検討課題である。また各古墳は 3 号墳を中心に配置されたものと捉えられ、「西福井古墳群」と呼ぶべき古墳群を形成していると言える。

この他の古墳時代の遺構としては、Ⅱ区の北端部にある SK10 から直口壺や高坏、二重口縁壺などが出土している。またⅢ－1－T 区の SK30008、Ⅲ－1－A 区の SK35031、SD35023、SD35004、SD35040 から直口壺や小型丸底鉢などが出土しており、これらは前期に属するものとみられる。

【古代】

飛鳥時代に属すると考えられる遺構に竪穴住居跡がある。Ⅰ区の南西隅で 2 棟検出されている。SB1、SB10002（写真 13）はともに一辺約 5m 程度の方形を呈する。またⅡ区の北端部で検出された SX2 は一辺約 5.5m の方形を呈する。

その他、奈良時代に属する遺構としては、Ⅰ区北西端で検出された溝 SD64 があり、これはⅡ区の溝 SD2007、SD32 につながっている。またⅠ区南東では溝 SD10002 があり、須恵器甕、坏、土師

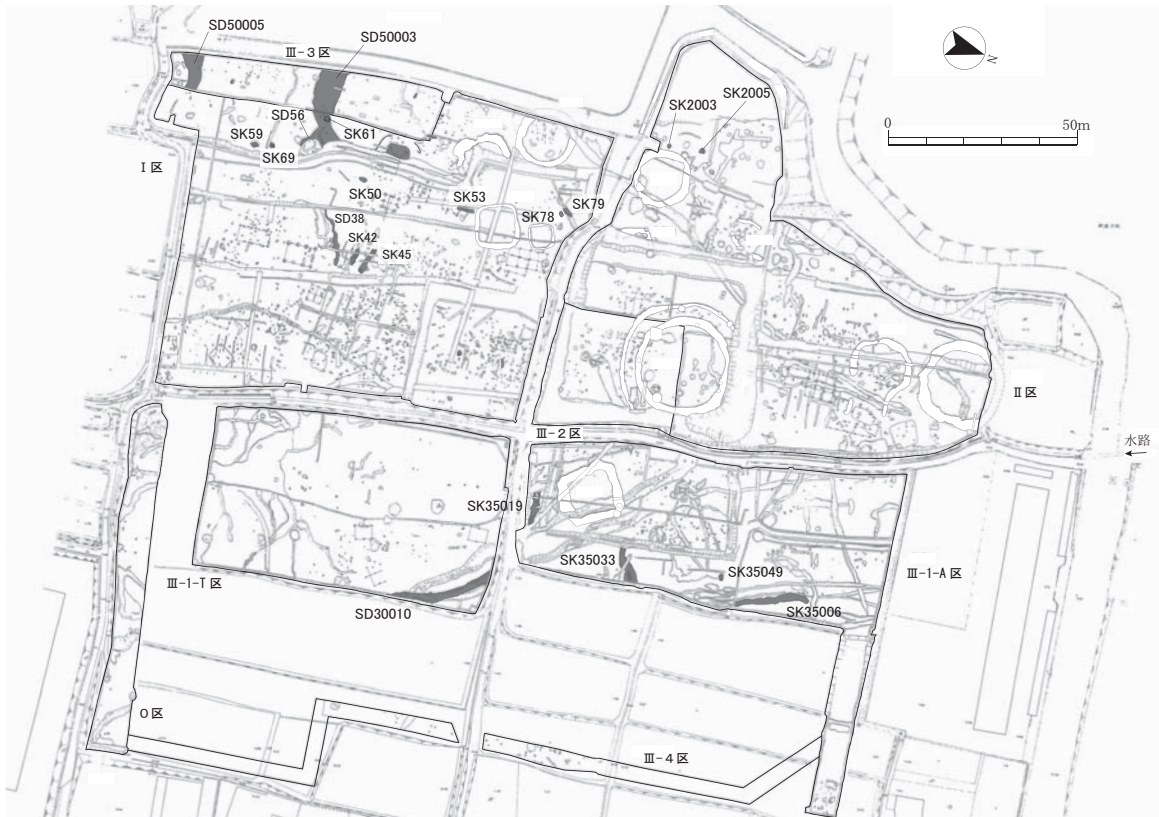


図6 西福井遺跡 弥生時代主要遺構配置図 (1/2000)

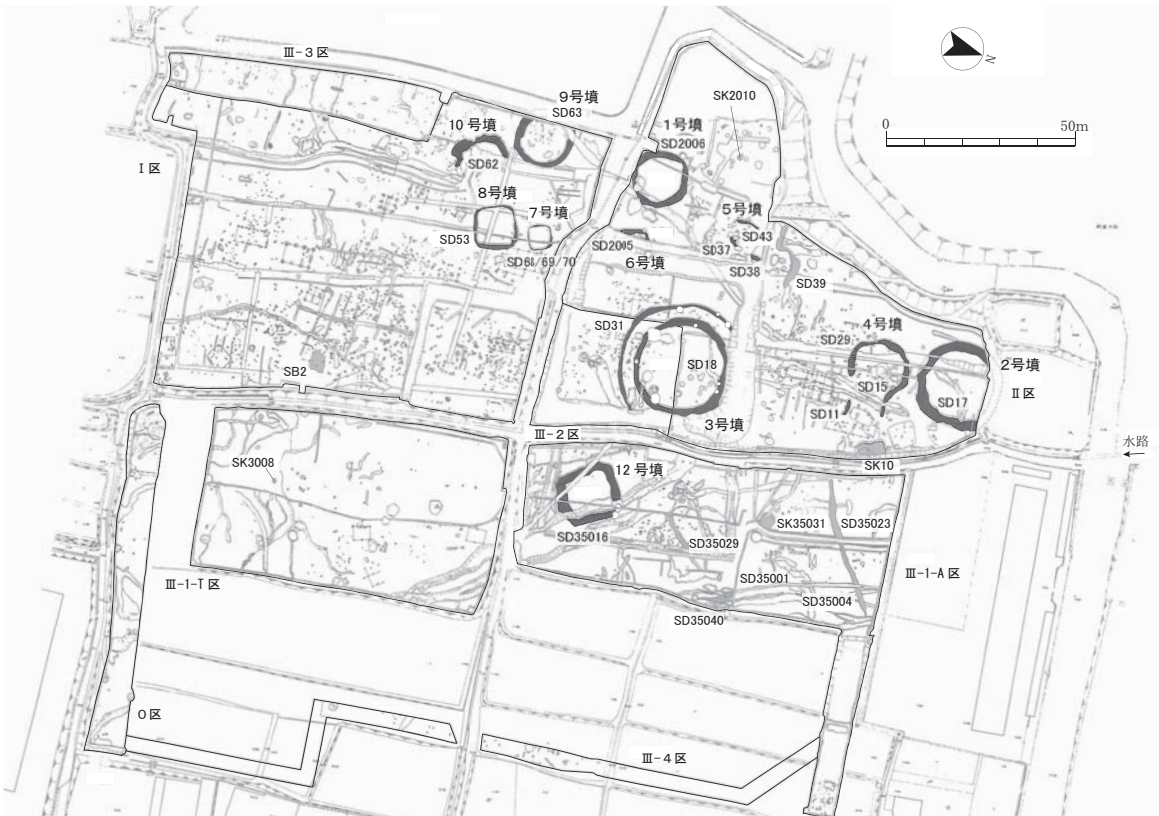


図7 西福井遺跡 古墳時代主要遺構配置図 (1/2000)
(濃色は古墳周濠、淡色は古墳以外の遺構を示す)

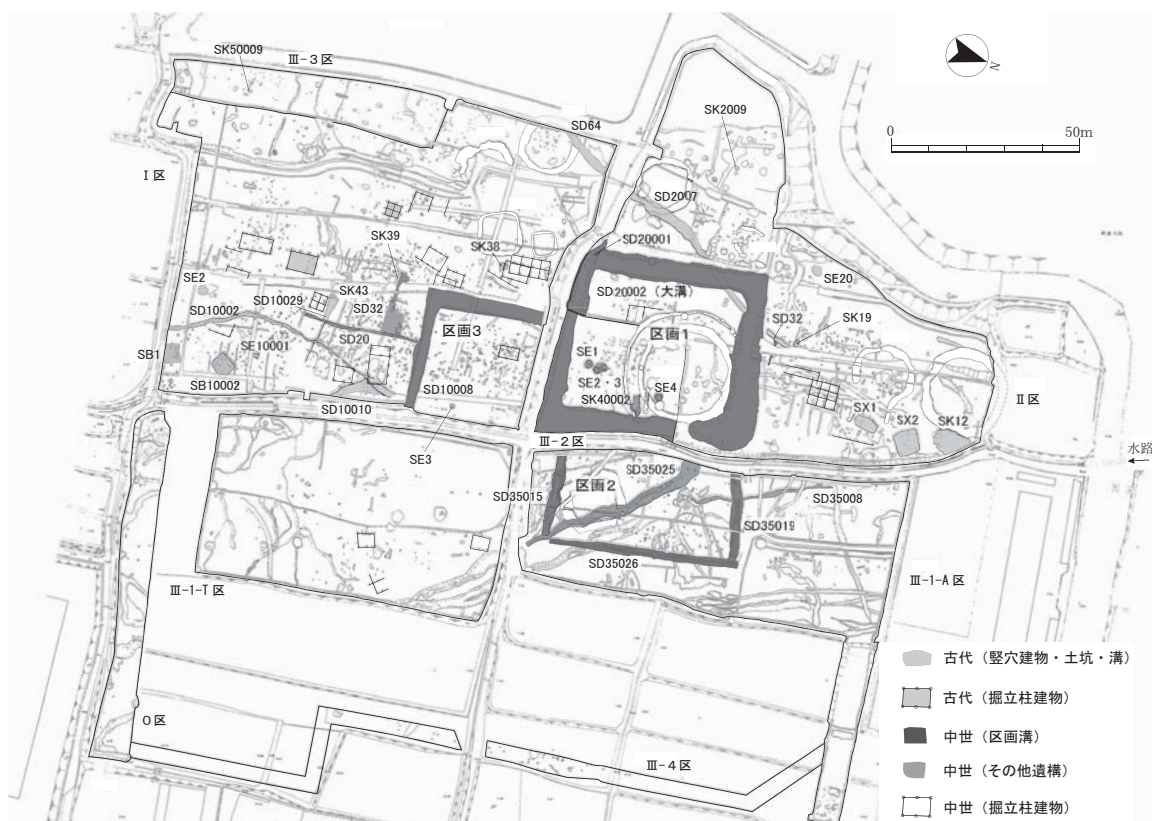


図8 西福井遺跡 古代・中世主要遺構配置図 (1/2000)

器坏などのほか、墨書土器が出土している（写真21・22）。墨書土器はI区SD10010、SK39でも出土している（写真22）。I区では井戸SE2、SE10001などがある。II区では北端部に土坑SK12があり、須恵器蓋、坏、土師器甕などが出土しているほか、SD2007からは須恵器坏などが出土している。またIII-3区では土器棺検出されている（SK50009、写真14）。建物跡としてはI区の中央部では2間×3間と2間×2間（総柱）の2棟の掘立柱建物跡を確認している（写真12）。

平安時代に属する遺構として明確なものは数が少ない。I区では土坑SK38、溝SD10029からまとまって遺物が出土しているほか、II区では土坑SK19、SK2009、井戸SE20などがあり、SK19からは土師器坏などがまとまって出土している（写真23）。

【中世】

中世に属する遺構として特筆すべきものは居館跡である。これは溝による区画の中に建物や井戸等を配するもので、最も大きい区画はII区からIII-2区にかけて検出したSD20002（大溝）で囲まれた区画（区画1と呼ぶ）で、内側で東西約35m、南北42mを測る（写真1）。区画の南西部はSD20001が上から掘り込まれているが、溝の再

整形であるかは分らない。区画内はピットが多数あり、建物が数棟存在したとみられるが、棟数の復元には至っていない。また複数の石組井戸（SE1～4）が検出されている（写真11）。

区画溝SD20002（大溝）は幅5～6mを測り、広い箇所では8mになる。東辺の北寄りで溝が途切れており出入口とみられる。溝を含めた区画1の規模は東西47m、南北50m以上となる。西辺の中央付近では、溝の断面は深さ1.6mを測り、大きく5層に分層される。大溝内からは土師器皿、瓦器碗などが出土しており、「佛」と書かれた墨書土器もみられる（写真2・24）。

区画1東側のIII-1-A区には幅2～3mの溝（SD35019、SD35026、SD35015）に囲まれた区画2が認められる（写真9・10）。II区とIII-1-A区の調査区境界は旧来の地形段差や水路等により調査できていないため、溝がコの字形を呈するのか四周めぐるのかはわからない。溝の内側で東西24m以上、南北45mを測る。区画内にはピットが多数検出されているが、建物の復元には至っていない。また井戸もみられる。SD35019とSD35026は一連のものであるが、SD35015とは南東隅で接することなく、ここで溝が途切れる。東辺のSD35026は北端が深さ約0.8m、南端が0.4m

と浅くなり、幅も狭くなる。北端の埋土は5層からなる。北辺のSD35019は深さ約0.5mで埋土は4～5層に分層される。南辺のSD35015は深さ約0.5mで3層からなり、最下層の暗青灰色粘土からは瓦器碗などが出土している。

区画1南側のⅡ区には、南辺が幅3m程度、西辺が幅4m程度の溝SD10008で囲まれた区画3がある。区画は内側で東西28m以上、南北27m以上を測る。SD10008が東のⅢ-1-T区まで延びていないので、Ⅰ区とⅢ-1-T区の調査区境界の真下をめぐっている可能性がある。区画内にはピットが多数検出されており、掘立柱建物が1棟復元できる。この他井戸、土坑等が検出されている。

区画1のSD20002（大溝）等の出土遺物から、これらの区画溝は14世紀を中心に機能していたと考えられる。

4. おわりに

以上、昭和58年に実施された西福井遺跡の発掘調査について、各時代における概略を述べた。各時代ともに特徴的な遺構、遺物のあり方を示しており、特に11基からなる古墳群や中世の居館跡については、茨木市域はもとより北摂地域にとっても重要な資料ということができよう。遺構や遺物の詳細については触れることができなかったが、ここに概要を紹介することで、地域の歴史の復元や文化財の活用に資することができれば幸いである。

謝辞

本稿の執筆にあたり、茨木市立文化財資料館の清水

邦彦氏にご配慮いただきました。末尾ながら深謝いたします。

註

- (1) 新修茨木市史 第七巻史料編 考古（茨木市史編さん委員会2014）に土器写真が紹介されている。
- (2) 奥1998では12基としていたが、遺構を検討した結果、11号墳とされていたものは弥生時代の別遺構であり古墳ではないことが明らかになったため、これを欠番とし、計11基からなる古墳群として把握するに至った。

参考文献（五十音順）

- 茨木市史編さん委員会2014『新修茨木市史 第七巻史料編 考古』茨木市
- 茨木市立福井公民館・福井地区郷土歴史資料館1999『福井高等学校遺跡の概要』
- 大阪府教育委員会2017『西福井遺跡－一般府道余野茨木線歩道整備工事に伴う発掘調査－』大阪府埋蔵文化財調査報告書2016-2 大阪府教育委員会
- 大阪府教育委員会2018『西福井遺跡Ⅱ－一般府道余野茨木線歩道整備工事に伴う発掘調査－』大阪府埋蔵文化財調査報告2017-1 大阪府教育委員会
- 奥和之1998「5世紀代の小規模墳について」『みかん山古墳群』大阪府埋蔵文化財調査報告1997-2 大阪府教育委員会 pp.48-52



写真1 3号墳と区画1（Ⅱ区・Ⅲ-2区、南から）



写真2 Ⅱ区大溝出土墨書土器



写真3 弥生時代前期土坑 SK50 (I区、南から)



写真4 弥生時代前期土坑 SK69 (I区、南から)



写真5 1号墳 (II区、東から)



写真6 2号墳 (II区、西から)



写真7 2号墳 (右) と4号墳 (左) (II区、上が西)



写真8 9号墳 (手前) と10号墳 (奥) (I区、北から)



写真9 12号墳 (左) と区画2 (Ⅲ-1-A区、上が西)



写真10 区画溝 SD35019、SD35026 (Ⅲ-1-A区、北から)

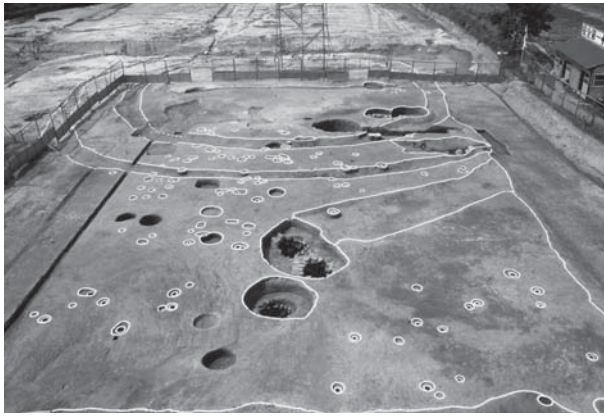


写真 11 3号墳と区画1の石組井戸（Ⅲ-2区、南から）

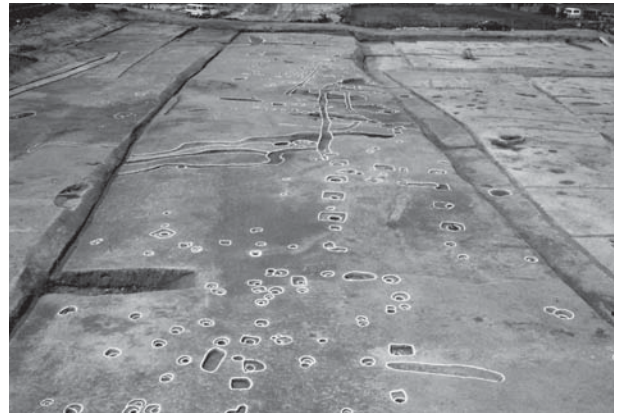


写真 12 奈良時代建物と小ピット群（Ⅰ区、南から）

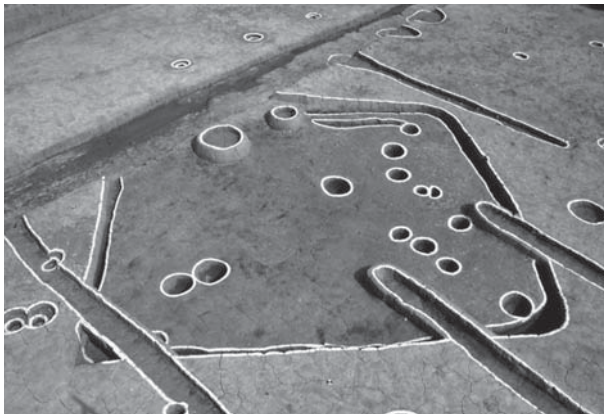


写真 13 飛鳥時代竪穴建物 SB10002（Ⅰ区、北西から）

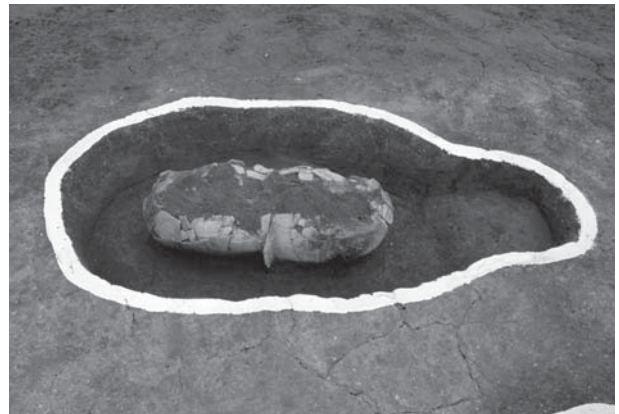


写真 14 奈良時代土器棺 SK50009（Ⅲ-3区、西から）

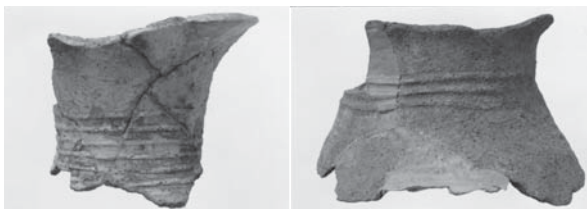


写真 15 Ⅰ区土坑 SK61 出土弥生土器



写真 16 Ⅰ区土坑 SK69 出土弥生土器



写真 17 Ⅰ・Ⅲ区出土石器



写真 18 3号墳 SD18 出土円筒埴輪



写真 19 1号墳 SD2006 出土円筒埴輪



写真 20 2号墳 SD17 出土鶏形埴輪（左）・円筒埴輪



写真 21 I 区 SD10002 出土土器

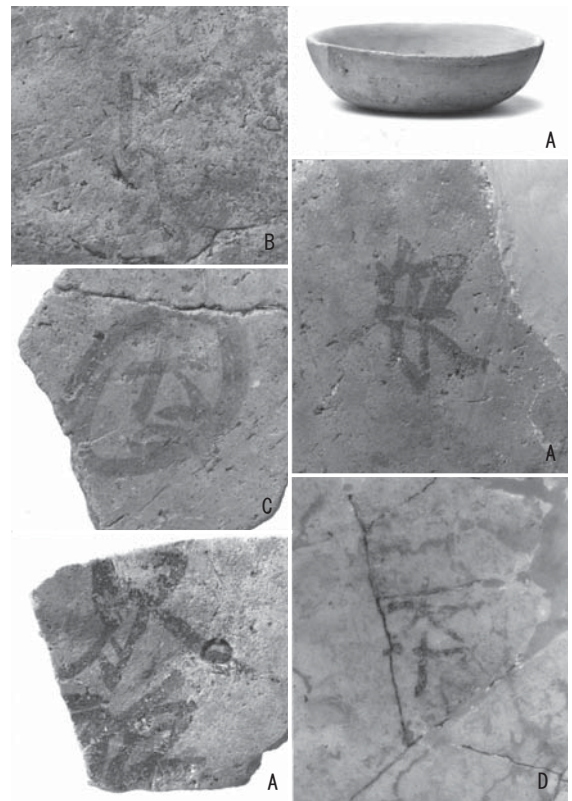


写真 22 I 区出土墨書土器 (A: I 区 SD10010、
B・C: I 区 SD10002、D: I 区 SK39)



写真 23 II 区 SK19 出土土器



写真 24 II 区大溝出土土器